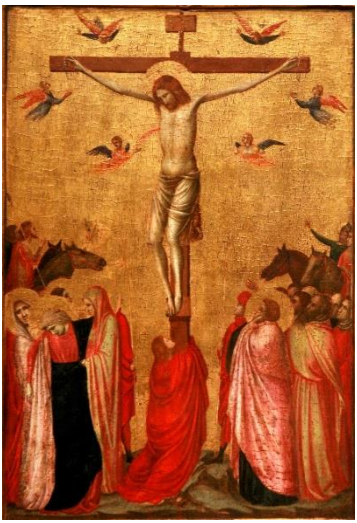
神の義　知っておきたいキリスト教のことば　(40)

「♫か～みのく～にと　かみのぎを～　♪　ま～ずもと～めよう～♬」

これは日本聖公会聖歌集 483 番の歌詞です。「神の国」と「神の義」、歌っている時には余り感じませんが、よく考えるととても分かりにくい言葉です。今回と次回は、この二つの言葉について見ていきたいと思います。



「義」という言葉は、旧約聖書に多く出てきます。神さまや人間の正しい行為のことを「義」と呼ぶのですが、この正しさは倫理や道徳のように世間一般の判断基準を基にしているわけではありません。

旧約における「義」（ツァドック）は、その当事者間において正しいかどうかが重要となります。したがって「神の義」とは、神さまと人間との関係において、人が契約に則した行いをしているかどうかが大切なのです。

新約の時代になっても、この考え方は引き継がれていきます。聖書に出てくるファリサイ派の人々は、自分たちは神さまの前に「義」であると考えていました。

しかしパウロは、「義人はいない。ひとりもいない」（ローマの信徒への手紙 3 章 10 節：口語訳）と言います。義とは本来あるべき正しい状態のことだと言えますが、自分の行いだけで「義」となることは出来ないのです。

パウロは「神の義」とは神さまによる救いの出来事であり、イエス様の十字架の贖いによって与えられた賜物であると言います。イエス様を信じることによって、神さまは救いを与えられます。そしてその救いとは、わたしたち人間が神さまと本来あるべき状態に戻ることなのです。

ルターはそれを「信仰義認」、つまり「信仰によって義と認められる」という言葉で理解したのです。

次回は「神の国」です。お楽しみに。